

RADIUM CITY



ラジウム・シティ

—文字盤と放射線・知らされなかった少女たち—



映画『ラジウム・シティ』へのお誘い

2012年の春、前年のフクシマから1年が過ぎた頃、『ラジウム・ガールズ 2011』と題されたアルバムが届けられた。プロジェクト・アンダークと名付けられたバンドは3人編成で、ドイツ人のディーター・メビウスの作ったベースのトラックに、Phew、小林エリカのふたりがメロディと歌詞を載せていた。イヴリンとかトレイシーとかキャサリンとか固有の名前を持つ女性たちが、そこでは主人公だった。

彼女たちには実在のモデルがいる。1世紀ほど前のアメリカで、ラジウムを使つての夜光塗料工場で働いていた、ごく普通の女性たちだ。特別なことなど考えてもいない。働いて給料をもらい買い物をして楽しいひとときを過ごす。いずれ結婚もして、家庭を持ち、子育てをし、いつかその子どもたちも若者になり、輝く青春を謳歌するだろう。ありがちな未来。平凡でささやかな夢に覆われた彼女たちのあるはずだった未来は、ラジウムが放つ放射性物質によって一気に崩れ去る。

何の防護もなく、知識もないまま作業中に被爆した彼女たち。ある者は命を絶たれ、ある者はさまざまな障害を背負い、その重荷とともに生きていくことになった。

病を生き延びた女性工員たちは、もはやかつてのようには未来を見ることができない。その不自由な身体を引きずりながら、会社や政府に対して訴訟を起こす。まさか自分がそんなことをするとは、病気以前の彼女たちは思いもしなかっただろう。病の前と後。その時間と歴史の切断を超えて闘う彼女たちは「ラジウム・ガールズ」と呼ばれるようになる。

アルバム『ラジウム・ガールズ 2011』が歌うのは、そんな彼女たちの物語だ。もちろん実際の彼女たちのことではない。想像上のラジウム・ガールズたち。いや、今ここにいるラジウム・ガールズたちの物語が、そこでは歌われていた。つまり、「今ここに」と思わざるを得ないような状況の中で作られた歌が、そこにはあった。

そしてある日わたしは Phew と会い、彼女たちに取材して作られた「Radium City」と題されたドキュメンタリーがあることを教えられた。25年以上前の映画だ。すぐに YouTube にアップされたそれを観た。誰もがイメージする公害や労災の訴訟の際の、どこか悲痛な空気を、彼女たちは持たない。あるはずの未来を夢見た輝けるガールだった頃の何かが今も彼女たちに貼り付いて、今の彼女たちを作っているのだとも言いたくなる。年齢や病気で変貌したその姿とはまったく関係ない。最悪の事態のその暗闇の中で、彼女たちは自然発光する。力強ささえ感じた。

アルバム『ラジウム・ガールズ 2011』から伝わるのも、その奇妙な明るさと強さである。かつて夢見られた未来は閉ざされたかもしれないが、それ故にその暗闇の中で輝く一歩をごく当たり前に踏み出した彼女たちの現在が、まさに彼女たちの未来としてそこにあるのだと、彼女たちの奇妙な明るさと力強さは語っているように思う。彼女たちの今こそが彼女たちの未来なのである。アルバムから見えて来るその姿が、映画には古ぼけた映像を通してはっきりと映っているのが見えた。

だとしたら、アルバムだけでなく映画も上映して初めて、日本における「ラジウム・ガールズ」の物語は完結するはずだ。いや、完結するというよりも、それがいくつもの物語の種となり日本中に広がり出し、多くのラジウム・ガールズやボーイズの物語を生み出していくはずだ。まさにラジウム・ガールズこそが、わたしたちの今であり未来であるのだ。

つまりこの映画を観た潜在的なラジウム・ガールズやボーイズであるわたしたちは、気がつくどこかでふと、輝ける小さな一歩を踏み出しているに違いない。そしてそれが、断ち切られたわたしたちの未来を当たり前の現在に変える。そんな奇跡が当然のように起こるだろう。1世紀後、わたしたちは世界中の人々から何と呼ばれているだろうか？

樋口泰人 (boid 主宰)

ラジウム・シティ
文字盤と放射線・知らされなかった少女たち
Radium City

(1987年／アメリカ／105分／白黒・カラー／モノラル)

出演：マリー・ロシター、エディス・ルーニー、ジェーン・ルーニー、ジーン・ルーニー、ケン・リッキ、シャーロット・ネビンス、マーサ・ハーツホーン、キャロル・トーマス、ジェームス・トーマス、ウェイン・ウイスブロック、ドン・ホール、ロッキー・レイクス、ボブ・レイクス、メアリー・オズランジ、スティーブン・オズランジ、ジャニス・キーシッグ、ジョアン・キーシッグ、環境汚染と闘う市民の会

監督・プロデューサー：キャロル・ランガー
音楽：ティミー・カペロ
撮影：ルーク・サッシャー
編集：ブライアン・コトナー、キャロル・ランガー
録音：ジョン・マーフィー

ラジウム・ガールズ——1920年代アメリカ、ラジウム・ダイヤル社の工場で時計の文字盤に夜光塗料を塗るペインターとして働き被曝した若い女性たち。筆先をなめて尖らせるよう指導された彼女たちは、その後、腫瘍や骨障害で苦しみ、多くが亡くなっていった。

『ラジウム・シティ』は内部被曝の存在が広く知られるきっかけとなったラジウム・ガールズたちと、その後の街に生きる人々を描いたドキュメンタリーである。

舞台となるのは、アメリカ中西部のイリノイ州オタワ市。かつてラジウム・ダイヤル社の工場で多くの人々が亡くなったこの街では、半世紀以上たってもなお、取り壊された工場の欠片が町中に散らばり、ホットスポットを生み出している。

キャロル・ランガー監督は、かつてのラジウム・ガールズやその家族、そしてオタワの住民たちによる証言を記録し、一本のフィルムとして完成させた。

目に見えない放射能による被害、企業や政府の隠蔽体質、恣意的に引き上げられる安全基準値、地域経済における産業と雇用の抱える困難・・・彼らの証言によって浮き彫りにされるさまざまな問題は、現代を生きるわたしたちにとっても決して無縁のことではない。

本作は国内外の映画祭で高い評価を受け、米国のみならず各国のTV局で放映、アカデミー賞候補と目された。また、米国環境保護庁がオタワの除染作業にスーパーファンド法を適用するきっかけにもなった。

監督プロフィール

キャロル・ランガー Carole Langer



ランガー監督(右)とラジウムダイヤル社
元従業員のマリー・ロシター

1942年、ニュージャージー州、ジャージー・シティ生まれ。スタンフォード大学心理学修士卒業後、NYにて Grey Advertising 社にて女性初のアカウント・エグゼクティブとして勤務、1968年には個人の広告会社を設立した。この間、クリオ賞を3度受賞など、CMプロデュース・監督で多数受賞。

1978年、個人の制作会社を設立。CMより長尺の映像制作を始める。ミュージック・ビデオやコンサート・フィルムの他、Avis、Volvo、IBM、Warner Brothers 社などの企業映像、公共広告なども制作。

1980年、初の長編ドキュメンタリー作品「Joe Albany ... A Jazz Life」をプロデュース・監督。81年ロンドン映画祭にて受賞。その他、ロサンゼルス映画祭、シカゴ映画祭にて受賞。劇場公開時に「The New York Times」紙のヴァインセント・キャンビー記者より評価を得る。PBSとBravoにて全米放映。

1987年の長編作品「Radium City」がリンカーン・センター映画祭にて上映後、多くの国内外の映画祭で上映され、アカデミー賞候補との評価を受ける。劇場公開の他、HBO、The Discovery Channelにて全米放映。Channel Four(イギリス)、Der Spiegel Television(ドイツ)の他、Discovery Europe やオーストラリアのTV局でも放映される。

1991年「Who Killed Adam Mann?」が「FRONTLINE」にて放映され、翌92年にデュポン賞シルバーバトンを受賞。1993年、AIDS啓発デーに「FRONTLINE」で放映された「AIDS, Blood and Politics」はピーボディ賞にノミネートされ、「The New York Times」紙上にて批評家ウォルター・グッドマンに他局の同テーマの番組と比べ「薄っぺらな内容の番組とは違い、本気の報道である」と評される。

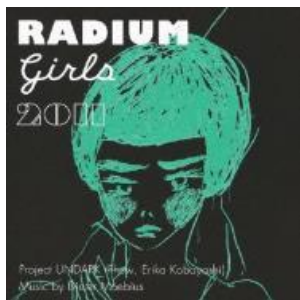
1995年、コメディアン、ジェリー・ルイス初公認の伝記番組「Jerry Lewis: The Last American Clown」を制作し、A&Eネットワークにて放映。批評家より4つ星の評価を受ける。その後も、女優ジャネット・リーについての伝記「Intimate Portrait: Janet Leigh」(96年)やラナ・ターナーの娘シェリル・クレーンの視点で女優の生涯、1953年の愛人殺人事件の犯人について綴る「Lana Turner... A Daughter's Memoir」(01年)、ジャネット・リーのベストセラー自伝を題材にした「There Really Was A Hollywood」(02年)など多くの伝記番組を手がけ、1999年、A&Eネットワークの「Biography™」4時間特別番組として放映された「The Rat Pack」は視聴率記録を更新し、エミー賞の全体的なカテゴリーにノミネートされた。

2009年に9.11のトラウマに苦しむニュー Yorker たちが求める無条件の愛の必要性についてドキュメンタリー「The Dogs of New York」を制作。彼らのトラウマにより、ニューヨーク市には100万匹もの犬が増え、犬の短時間デイケアサービスは320億ドルのビジネスとなっている。

現在は、伝説の女性物まね芸人ジュリアン・エルティンジについてのドキュメンタリー「Lady Bill... The Story of Julian Eltinge」を制作中。NY芸術基金の支援を受け、2014年12月に完成予定。

Project UNDARK

プロジェクト・アンダークとは、Phew と小林エリカによって作られた音楽ユニット。2012 年に発表されたアルバム『ラジウム・ガールズ 2011』は、この『ラジウム・シティ』に着想を得て作られたもの。アルバムは、当時その場にいたかもしれない架空の「ガールズ」それぞれの歌によって構成される。彼女たちのあり得たかもしれない未来と、それを夢見たかもしれない過去が浮かび上がらせる彼女たちの現在が、それを聞くわたしたちの現在へと繋がる。このアルバムによって『ラジウム・シティ』は日本公開されることになった。



ラジウム・ガールズ 2011

Radium Girls 2011

Project UNDARK (Phew, Erika Kobayashi)

music Dieter Moebius (Cluster)

<http://projectundark.com/>

定価 ¥2,500(税抜)

制作・発売元: BeReKeT <http://www.bereket.info>

『ラジウム・シティ』日本公開に寄せて

「妖精の光」と科学者マリ・キュリーが呼んだその青白く発光する放射性物質ラジウムの光を、人間がその歴史のうちではじめて手にしたのは 1902 年のことだった。

それは子ども向けの伝記にも記される偉大な瞬間だ。

マリとピエールのキュリー夫妻は、雨漏りするおんぼろの研究室で研究にうちこみ、11 トンのものピッチブレンド(瀝青ウラン鉱-ちなみにドイツ語でPechblendeは「不幸の石」を意味する)から、遂に0.1gのラジウムを取り出すのだ。

私もその話をどこかで読んで知っていた。絵本だったかもしれない。そして私はそれを単純に働く女性だとか努力だとか科学の進歩を教え諭す逸話のひとつくらいにしか考えていなかった。私は、キュリー夫人が“放射能”という言葉の名づけ親であることを知らなかったし、その言葉が生まれてから福島第一原子力発電所の放射性物質が漏れ出ているようないま現在に繋がるまでの経緯を、知らなかった。

そして、かのラジウムが、その発見の後、いったいどのように扱われたかなど、私は考えてもみなかった。

そんな折りに偶然、私は「ラジウム・ガールズ」と呼ばれる少女たちがいたことを知った。アメリカ、ニュージャージー州オレンジ、1917 年の米国ラジウム社にはじまり、各地で、時計の文字盤にラジウム蛍光塗料をペイントし被曝した少女たちのこと。(そう「妖精の光」ラジウムは、その後、暗闇の中でも光る時計の文字盤の蛍光塗料として使われたのだ!) 働く少女たちは、細い筆でその文字盤へラジウム蛍光塗料を塗りつける。その筆を時折唇につけて整えるよう教えられる。少女たちの髪は、クローゼットは、ラジウムで光り輝いたという。

そうしているうちに、私はキャロル・ランガー監督のドキュメンタリー映画『ラジウム・シティ』に辿り着いた。イリノイ州オタワ、かつてそこにあったラジウム・ダイヤル社とそこで働いていた少女たちを巡る 1987 年制作の作品だ。かつて工場で働いた少女、その家族や生存者たちにインタビュー、その街に暮らす人々、街そのものに残されている目には見えない放射性物質。ただ淡々と丁寧かつ執拗な調査を積み上げてゆく手法と美しい映像のこの映画に、私は釘付けになった。

「ラジウム・ガールズ」たちは決して、ただお金と引き換えにたまたま被曝した不幸な少女ではないし、『ラジウム・シティ』は決して、ただ遠く離れた外国の過去の逸話ではない。それらは、私たちのいまに繋がる、切実なものなのだ。

映画のはじまりには、その街の外れにあるカトリック墓地が映し出される。

「現在も、女工の墓に測定器をかざせば 放射線が検出されるだろう。」

そうしてシンガーの Phew さんと共に Project UNDARK として「Radium Girls 2011」というプロジェクトがはじまったのであった。

小林エリカ

作家・マンガ家。2014 年「マダム・キュリーと朝食を」(集英社すばる)で第 27 回三島由紀夫賞候補、第 151 回芥川龍之介賞候補。著書は「放射能」の歴史を巡るコミック「光の子ども 1」(リトルモア)、作品集に「忘れられないの」(青土社)。小説にアンネ・フランクと実父の日記をモチーフにした「親愛なるキティーたちへ」(リトルモア)、「空爆の日に会いましょう」(マガジンハウス)。コミックは詩をモチーフにした「終わりとはじまり」(マガジンハウス)など。クリエイティブ・ガールズ・ユニット kvina としても活動中。

ラジウム・シティからラジウム・ガールズへ

2011年3月11日からもう3年以上たってしまった。まだ呆然としている。沢山の人が死に、さまざまの出来事がおこった。怯え怒り愕然とし、なにかできることなにかできることをと右往左往しているうちに、自分の目前の生活ですら覚束なくなった。貧すれば鈍す、大震災が起こり原発が爆発したからといって、役立たずだった人間が、いきなり世の中に有用なことができるようになるわけではないのに。あれよあれよという間に、政権は交代し、東京でオリンピックが開催されることが決定し、来年には川内原発が再稼働される見込みとなった。つい1週間前のことが遠い昔の出来事のように感じることもあるし、福島第一原発の事故は、このあいだ、おこったことのようにも思える。時間が一定のテンポを刻みながら、過去から未来へと流れなくなってしまった。

自分の認識の外にある現実には恐怖でしかない。自然災害は免れ得ないとしても、どこかの時点で人類が違った選択をしたら、2011 年の東京で「知覚できないけれども在る」物質に怯えながら暮らすといった事態にはならなかったのではないか。19 世紀末にベクレルが放射線を発見しなかったら、第一次世界大戦で同盟国が勝利を収めていたとしたら、ルーズベルトがもう数ヶ月生きながらえていたら、2011 年の世界はどのようになっていただろうかと、不遜にも時々考えた。あの年は、日々更新される情報を追うほどに、放射能について調べれば調べるほど、知力気力体力が失せていった。多くの言葉はそらぞらしく響き、多くの歌はうるさく聞こえ、以前なら魅力的に感じた旋律やリズムは力を失い、とても音楽を作る気になれなかった。正しく立派な声明やいさましい議論、数々のチャリティーイベントを横目に、暇を作っては友達に会って無駄話をし、無為の時間をすごした。

ケーキを食べながら、小林エリカさんから、時計の文字盤を塗装する工場で被曝したラジウム・ガールズたちの話をきいたのは、2011 年の秋だったか冬だったか。その日、帰宅してすぐに radium girls で検索し、ヒットした『Radium City』を YouTube で見た。衝撃だった。映画に出てくる、ショートボブにパンツルックの女の子たちの、パーマネントのあつた髪に洒落た帽子や靴、毛皮の襟巻きで着飾った女性たちの写真は、なんとなく思い描いていた質素な服装にひつつめた髪の女子工員というイメージからかけはなれていた。ロストジェネレーション、ジャズと禁酒法、フラッパー、女性に参政権が与えられ、第一次大戦の特需に沸き世界最大の経済大国となった 1920 年代のアメリカ。写真の女性たちも、フィッツジェラルドを読み、仕事が終わるとダンスに出かけ、水着で水泳を楽しんだりしたのだろうか。とりわけ、映画の最初のほうに出てくるラジウム・ガールズたちの集合写真には心を奪われ、何度も繰り返し見た。この八頭身美人はミスアメリカに応募しようと考えたことはなかったのだろうかとか、黒っぽい髪で小柄の内気そうな娘の両親は東欧あたりからの移民でハンガリー刺繍が上手かもしれない、などなど、妄想が膨らんで、果ては、写真の女性達が自分に語りかけているような錯覚に陥った。女性達が放射線障害に苦しめられ悲惨な出来事と闘い始めているころの写真からさえも伝わってくるのは生の響きだった。そして、その残響は、自分のなかのなにかと共鳴し、数ヶ月後には 1 枚の CD になった。音楽がまたはじまった。

Phew

1979 年、アール・サリー結成。日本の初期パンク・ムーヴメントの中で伝説のバンドとなった。その後、坂本龍一、コニー・ブランクなど、国際的な音楽家たちとの共作を発表。一時活動を停止したが、87 年から再開。以降、ソロ活動のほか、big picture、NOVO TONO、MOST などでのバンド活動も続けてきた。2010 年にカバーアルバム『Five Finger Discount』をリリース。現在、2013 年からはじめた電子音楽のアルバムを録音準備中。

➤ 『ラジウム・シティ～文字盤と放射線・知らされなかった少女たち～』関連年表

1898年 マリ、ピエール・キュリー夫妻ラジウム発見

1914年 ラジウム・ルミナス・マテリアル社、ニューヨーク市で創業

1914-1918年 第一次世界大戦

1917年 ラジウム・ダイヤル社、イリノイ州シカゴ市で創業

1921年 ラジウム・ルミナス・マテリアル社、ニュージャージー州エセックス郡オレンジ市に工場設立、USラジウム社に社名変更。

⇒約70名の女性がラジウムなどの放射性物質を含む夜光塗料(※1)による文字盤の塗装工として雇われた。1923年までに5人の若い女性がラジウム起因と見られる骨腫瘍などの疾患(※2)で死亡している。

1922年 ラジウム・ダイヤル社、イリノイ州オタワ市に移転

⇒最盛期の1925年頃には1,000人近くの若い女性が文字盤の塗装工として雇われた。

1925年 ニュージャージー州エセックス郡の検視局長が、USラジウム社の塗装工たちを死に至らしめた骨腫瘍や再生不良性貧血の原因を放射性物質とする報告書を公表

1928年 USラジウム社で働いていた5人の女性たちが同社を提訴、「ラジウム・ガールズ」と呼ばれ新聞を賑わし内部被曝の存在が広く知らさせる知らせのきっかけとなった

⇒1万ドル(現在の通貨で1313万7千7,000ドル相当)の賠償金と年600ドル(8,200ドル相当)の年金を要求し勝訴するが、補償金を手にした頃には、全員既に身動きが取れるような状態ではなかった。

1929年 ラジウム・ダイヤル社に7年勤めていたマーガレット・ルーニーが24歳で死亡。

1929年 ニューヨーク証券取引所での株価大暴落をきっかけに世界大恐慌に突入

1934年 マリ・キュリー死去

⇒死因は再生不良性貧血と言われる

1938年 ラジウム・ダイヤル社の元塗装工キャサリン・ドナヒューが同社を提訴、勝訴するが同年7月27日に死亡。

1938年 敗訴を受け、ラジウム・ダイヤル社は閉鎖されたが、6週間後、ルミナス・プロセス社と名を変え、工場を開設。再び文字盤を塗る作業員が募集された。

1939-1945年 第二次世界大戦

⇒大戦中、ルミナス・プロセス社の経営者であるJ・ケリーは、工場を隠れ蓑に原子爆弾の原料となるポロニウムを生産していたと言われている。

1945年 8月6日広島、8月9日長崎に原子爆弾投下

1948年 アルゴンヌ国立研究所がオタワから約120kmの場所に建設

1954年 第五福竜丸がマーシャル諸島近海にて米軍の水爆実験により被曝

1968年 アルゴンヌ国立研究所内に人間放射性生物学センター設立、塗装工たちの被曝線量についての調査を開始

⇒被曝登録者は3,800人、このうち2,800人が夜光塗料産業関係者である。被曝基準制定の為に多くの被害者が協力、骨髄検査などの生検に応じたが、被験者には報酬や補償が支払われることがなかった

1968年 USラジウム社、放射性物質を含む夜光塗料の使用を中止

1977年 ルミナス・プロセス社、安全規則違反を繰り返し操業停止処分

1979年 アメリカ、スリーマイル島原子力発電所事故

1979年 マーガレット・ルーニーの遺族がアルゴンヌ研究所による遺体の調査に同意

1980年 米国、スーパーファンド法(※3)設立

1984年 イリノイ州、ルミナス・プロセス社の工場解体予算を承認

⇒1986年9月までにイリノイ州は650万ドルを社屋の除染に投入、同社の罰金は3万ドルだった。

1986年 ソビエト連邦、チェルノブイリ原子力発電所事故

1986年 米国環境保護庁がオタワ市の除染作業に着手

1987年 ドキュメンタリー映画『ラジウム・シティ』公開

1993年 人間放射性生物学センターによる被曝調査終了

2006年 米国保健福祉省、オタワ市の一部の地域が未だ通常よりも高い放射線量にあることを発表

2009年 米国環境保護庁、ニュージャージー州エセックス郡のUSラジウム社による汚染エリアの除染作業終了を発表

⇒除染作業は1991年～2004年までの13年間で、21,800万ドルの費用がかかった。

2009年 米国環境保護庁、4月下旬から7月にかけて160万ドルのスーパーファンドによってオタワ市の汚染エリアの追加除去作業をすることを発表

2011年 福島原子力発電所事故

2013年 米国環境保護庁、オタワ市の汚染16エリアのうちの2エリアの除染作業の変更を計画

⇒汚染土の入替作業は高額費用がかかるため、今後30年間は定期検査をしながらエリアの管理封鎖を提案。

※1

USラジウム社の「UNDARK」、ラジウム・ダイヤル社「Luna」など、ラジウムの暗闇で光る性質を利用した夜光塗料。

ラジウム・ガールズの事件がきっかけでその危険性が周知されるようになったが、第二次世界大戦中は軍用の腕時計や計器の文字盤に多く使用され、生産された数は数百万個に上る。

塗料は1960年代まで用いられており、塗装に従事した工員は米国とカナダで延べ4000人に至ると言われている。

※2

ラジウムはカルシウムと化学的性質が似ているため骨に沈着しやすく放射線障害を生じさせる。

抜歯をした後に顔が腫れるなどの症状から始まり、貧血、白血球の減少、感染症、骨腫瘍などで亡くなる塗装工が続出した。

※3

1978年のラブキャナル事件(ナイアガラ滝近くのラブキャナル運河で起きた有害化学物質による汚染事件)をきっかけに設立された米国の環境法規。

過去の土壌汚染に関わる広範囲の関係者に、対策修復コストの負担を求める法律。汚染責任者が特定されるまで環境保護庁が、「スーパーファンド」から調査・浄化費用を負担し、将来それらの費用を有害物質の排出に責任を持つ事業者負担させる。

➤ 作品評

ラジウム・ダイヤル社の惨劇の光景 ジャネット・マスリン

時計の文字盤に発光する数字を描き込むのは、当時としては素敵な仕事に思われていただろう。古い写真では、1920年代のイリノイ州オタワ市のラジウム・ダイヤル社で働く10代の女の子たちは、とても幸福そうに見え、高給を貰っていたので、裕福そうにも見える。輪郭で描かれた数字の内部を塗りつぶすのには技術が必要で、仕事もやりがいがあっただろう。この繊細な作業をするために、従業員たちは、筆先を唇でなめめることを推奨されていた。

その結果はキャロル・ランガーの『ラジウム・シティ』でも語られている通り、想像を絶するような悪夢よりもはるかに恐ろしいものであった。多くの女性がラジウムの影響で癌になり、その多くが若くして命を落とした。ランガーはそのことについて、酷な伝え方として、オタワ市の抱える問題のうちのほんの少しであることを作中の早い段階で伝えている。いずれにしてもそれは発端であり、ランガーの『ラジウム・シティ』は段階を追う毎に更に悲惨となる話を伝えている。『ラジウム・シティ』はそれらの出来事の複雑な結末に関して、その医学的結果と同じく十分に意識的に、その社会的・政治的影響について述べている。そこには、誰も想像ができないほど身も凍る現実の恐怖の話が浮かび上がってくるのである。

ラジウム・ダイヤル社の従業員たちが病にかかってからは、本作によると、とある訴訟が会社に重圧を加えることになったと伝えられている。そのために、会社は廃業し、そしてまた、町の別の場所で、ルミナス・プロセス社という新たな名で営業を再度開始した。若い女性たちは、危惧しながらも、働きつづけたのであった。(「19歳だと、危険なことについて誰も何も問いはしないし、必要な仕事をするだけ。」とインタビューを受けたうちの一人の女性は答えた。) 当時は大不況であり、第二次世界大戦によってルミナス・プロセス社はさらに確固たるものになっていった。その社長はアルバート・アインシュタインやルーズベルト大統領と面会して戦争への協力をし、ルミナス社は使用可能な原子爆弾のためのポロニウムを作り出すために、施設を利用し始めていた。

その間、死亡者数は増え続け、さらに巨大な謎に町は覆われていた。3名の老女たちは、彼女たちの姉の死について、医者が検視をする前にも関わらず、死亡後すぐ真夜中に埋葬されたことを思い返した。

戦後、原子力委員会は、墓地で高線量の放射性物質を検出するオタワ市の状況について調査をはじめた。(3名の老女は、撮影当時に検査のために墓地から掘り起こされた姉の遺体から放射性物質が抜けるのには、何世紀もかかると聞いたと語った。) 委員会は、多くの研究結果について機密事項としている。そして、1968年に、ラジウム・ダイヤル社の建物は解体され、その跡地は、その後しばらく精肉工場として使用されていた。とある女性は精肉工場を営んでいた家族のうち一人以外は癌で亡くなったことを語った。

建物のかけらは町中に散り散りになり、埋め立てられた。ひとりの男性は、残骸からあさってきた古いカウンターを、自宅の地下室に設置していることを自慢し、別の男性は1年前に検査のために誰かに持ち去られるまで、建物にあった装飾品を個人で保管していた場所を示した。その場所にはすでに何もないにもかかわらず、ガイガーカウンターは反応している。ここだけではなく、町中のほとんどの場所が同じ状況である。出生異常率は高く、ペットたちは病弱だ。あるひとりの猟師はひどく変形し、腫瘍に被われた鹿を仕留めることを恐れていた。

『ラジウム・シティ』は町の人々がこの恐ろしい事実と事実自体についてどのように取り組んで行くかについての話である。住人たちの怒りや悲しみを描くのと同時に、また別の人たちの恐れや、熱狂的な働きかけについても注目している。

ランガーのインタビューでは市長はやんわりと、問題を軽んじて答えしたが、地元でガイガーカウンターを持ち歩く自警団をするケン・リッチが撮影した市議会のビデオでは、無礼な質問をした者は警察によって退場させるとの断りの上で、現状廃社となったルミナス・プロセス社の建物の取り壊しについて議論している姿が捉えられている。

オタワの住民にはいろんな度合いでの受容、苦渋と混乱があらわれ、彼らの生活の困難さがランガーによって垣間見えることにより、感情もまた浮き彫りになっている。

ある信心深い女性の若い息子は癌を患っており、彼女は信仰と絶望について語っている。彼女が、神は息子を早くお迎えに来るべきなのかもしれないと感じた瞬間があると語った時、その少年の目は大きく見開いた。

ダウン症の妹がいる女性の母親は、ラジウム工場で働き、2回の流産も経験している。彼女の母は「人生で大事なものは、誰と知り合いかではなくて、人として何をするのかなのよ」とよく言っていたそうだが、死ぬ数ヶ月前には、母親は彼女の顔を見て「何を知ってるかではなくて、誰を知ってるのかなのよ」と言われたことが悲しかったと語った。

『ラジウム・シティ』はひとつの惨事についてだけではない。（「それは決して隔離されていない。オタワの工場経営者でもある一族が所有するクイーンズのウッドサイドにある閉鎖されたラジウム工場は、現在調査中である。」）この映画は、まずは工場に働きに出た10代の少女たちの自立を望む気持ちを、そして、苦難に立ち向かう姿とともに育ちが良く疑問を持たない危険について描いている。ランガーの論調は事実以上に非難的であったり、必要以上にセンチメンタルであったりするが、そのように横道にそれてしまう部分があることは、彼女がこの映画で伝える物語から理解ができる。この話は無視をすることができないほど大事なことであるからだ。

（「ニューヨーク・タイムズ」1987年9月26日）

観客 VS 厄介なテーマ ジャネット・マスリン

ゆっくりと、恐ろしい死、忌まわしい実験、取り返しのつかない環境汚染、それらは観客が無意識のうちではほとんど聞きたくないことである。それでも、キャロル・ランガーの『ラジウム・シティ』は観客を引き付ける、それが現実のものになる時、監督の手法とともにその巧みさについて賞賛されるのである。その策略は取り扱いにくい題材を受け入れやすいものにして、それがうまくいかず逆効果な時があるにもかかわらず、興味深いという以上に、くぎ付けになってしまう。なぜなら裏目でやるからだ。観客をあまりにも不快な方向へ押しつけ、ともすれば不愉快な題材を（例えば、乱暴で、蔑視的な『チャイナ・ガール』や論外である『悪魔の毒々サーファー』など）、あなたはそれらをギリギリまで押しやる。

イリノイ州オタワ市について、そしてラジウムクロックダイアルの生産工場での恐ろしい問題について語る映画の前半だけだと、観客はすぐに飽きてしまいそうである。オープニングタイトルは宗教的なサウンドで、カメラは執拗に、必要以上にセンチメンタルに、工場で働いていた人たちが眠る墓地を捉える。

さらに言うと、それらは、よくある悲劇的な話にも聞こえる。亡くなった姉？の思い出をまとまりなく話す（うち一人は姉の子供時代のお気に入りのドレスについて語っている）3人の老女たちの優しい声の存在は、ランガー監督は問題点を絞ることに苦労していることを、ほのめかしているようである。その他の残念なことは客観性の欠如である。ランガー監督は経営者家族のひとりであるジョセフ・A・ケリー・ジュニアの立場について全く説明しようとしていない。

しかしながらランガーは力強く語っている。彼女はこの惨劇についてのありふれた見解を勢いよく越えて、新たな展開に切り出している。オタワ市が当初の被害からこれまで、この問題についてどのように対応してきたかについてさらに悲観的な見方をしている。事実を受け入れることができず、避けようとしている市民がいること、放射性物質が不注意に取り扱われてきたことは汚染自体よりはるかに恐ろべきことである。それに加え、ランガーがますます悪い状況になる証拠と記録を冷静に積み重ねるにつれ、客観性は問題でなくなるような勢いを持つようになる。この話にはまた別の立場があるのを想像することはますます難しくなっていく。（ケリー氏の変更として、彼は最近、クイーンズのウッドサイドで経営する別工場での同じ汚染問題について取材している記者からのインタビューを断っており、本作のような映画に出演する可能性は薄くなった。）

つまりランガーはこの多くの環境汚染についてのストーリーが行き着くところよりも先までこの作品を展開させたことにより、そしてこの尋常でない危機へのオタワ市の反応が恐ろしいほど普通であることを

捉えたことにより、観客が最初に感じるかもしれない抵抗を、完全に回避している。話自体は、驚くほど寒々しく、無視することができないほど人の心をつかむのである。数名のオタワ市民、特に、ガイガーカウンターを手に町をさまようケン・リッチのような自称自警団員として警告と行動する役割を担った人物、一方的に理解ができない大勢の人々を困惑させることにもなる。このようなストーリーはヒーローのような存在が必要で、リッチはその期待通りの人物なのである。

(「ニューヨーク・タイムズ」フィルムレビュー)

『ラジウム・シティ』の放射線問題で、脚光を浴びる町 トム・ヴァレオ

『ラジウム・シティ』は若い女性たちがイリノイ州オタワ市で、ラジウムを使用した文字盤の製造工場を受けた放射能汚染の被害についての話である。

1980年に私はラジウムの文字盤の塗装工(ダイヤル・ペインター)について取材をするためにイリノイ州のオタワに向かった。腕時計や置き時計の表面や計測器を暗闇で発光させるために、何年もの間ラジウム塗装を施していた女性たちである。

彼女たちは長年にわたってかなりの量の放射線を浴びており、また、雇用主からは冷淡な処置も受けていた。多くの者が亡くなり、多くの者が腫瘍や骨障害に苦しんだ。

それにもかかわらず、彼女たちはその問題について口を開こうとはしなかった。1930年代に一人の放射能汚染の被害者が起こして世間の注目を浴びた訴訟によって、オタワ市を「死の町」と呼ぶ大見出しが並んだため、多くの地元民は、今回のダイヤル・ペインターの取材によりその当時のあだ名が再び呼び起こされてしまうことを恐れた。私は、過去に工場で勤務をしており、取材を受けてくれた方たちのインタビューをもとにラジウムがオタワ市にもたらした被害についての報告記事を書いた。

そして今回、ニューヨークの映画監督キャロル・ランガーは『ラジウム・シティ』という新作ドキュメンタリーで、ラジウム・ダイヤル・ペインターたちの話をスクリーンに持ち出した。

ランガーは、被害者たちが戦い抜く決意を表した側面からもこの問題について映画で語っている。これは、私が1980年に取材した当時には存在しなかったことである。

「私は、ごく一般の人でも、民主的なやり方を振り起こしてやってみると、彼らのコミュニティの環境を統制する力があることを伝えたかったです」とランガーは彼女のニューヨークのスタジオでの取材で語った。

『ラジウム・シティ』はふたりのナレーターを中心に展開する。一人は1922年に開業したラジウム・ダイヤル社の最初のダイヤル・ペインターのうちの一人、そしてもう一人は工場からの汚染によって残されたホットスポットを探し出すために町中をガイガーカウンターで追跡する男性、ケン・リッチである。どちらもシンプルに率直に語り、強烈な印象を残す。

前従業員のマリー・ロスターは、ラジウム・ダイヤル社で働いていた若い女性たちは、文字盤を描くためのブラシの先を尖らせるために、唇を使うよう指導されていたことを語った。彼女の親友で同僚のキャサリン・ドナヒューは1938年に亡くなる僅か数日前まで数千ドルを会社から授けられており、マリーはこれまでに多くの同僚が癌で亡くなったのを見てきた。マリーの骨格はラジウムで大きな被害を受けており、彼女の足は骨格障害により腫れ上がり炎症を起こしている。

マリーは仕事終わりに若いダイヤル・ペインターたちが残ったラジウム塗料を使って暗闇で光るあご髭や口髭を顔に描いていたりしたことを述べた。「ある子は歯にも塗料を塗っていて。彼女は塗料が乾くまで口を開け、暗室に彼女が入ると彼女のスマイルだけが浮かび上がっていた。」とマリーは述懐する。

その当時、オタワ市では誰もラジウムが危険だとは疑わなかった。事実、ラジウムは関節炎から高血圧まで全ての良薬とうたわれており、医者によってはラジウム注射を施す医者もいた。

1938 年になってキャサリン・ドナヒューが勝訴し、ラジウム・ダイヤル社がさらなる訴訟を避けるために倒産したことで、ようやくラジウムの危険性は広く認知された。

しかしながら経営者のジョゼ・ケリー・シニアは、数ブロック離れた場所でルミナス・プロセス社という新会社を立ち上げ、1977 年に工場内の高線量のラジウム汚染により、州の調査官に強制封鎖されるまで営業を続けていた。ラジウム・ダイヤル社の工場跡は精肉工場になり、ランガーがとあるオタワ在住者に聞いたところによると、精肉工場を営んでいた家族のうち一人以外は全員癌で亡くなってしまったらしい。工場が解体された際にがれきは町中にばらまかれ、数えきれないほど多くのホットスポットを生み出している。

ケン・リッチはガイガーカウンターでゴミ廃棄場を計測していた時に、ホットスポットを発見した。彼が映画で説明するには、それは冬の日の一部だけ雪が溶けたスポットを見つけたことに始まる。彼がそのスポットにガイガーカウンターを近づけるとガイガーカウンターは激しく音を立てて、地表から相当量の放射線量が放出されているのを計測した。長年にわたり、リッチは町中で同様のホットスポットを見つけている。(地元の墓地で、元ダイヤル・ペインターたちが埋葬された墓では、彼らの骨に残ったラジウムが計測されている。)

リッチは彼がガイガーカウンターを片手に町中を歩いて調査しているのは、多くの住民は少し異常に思っていることを認めているが、彼は人々に危険が間近にあることを説明し、それを食い止めるように喚起している。イリノイ州が資金を豆乳して汚染されたルミナス・プロセス社の工場を解体した際に、町の人々は地元のごみ埋め立て地にがれきを埋めるように申し出をした。(がれきはワシントン州の核物質処理場に輸送されている。)

ランガーの映画が示すように、問題は存続している。ホットスポット近辺で育った子どもたちは癌を患っている。ラジウム・ダイヤル社の工場跡地側に住む一人の男性は、彼の犬たちには絶えず腫瘍ができ、短命であると訴える。狩人たちは腫瘍で変形した鹿を持ち込む。

しかしランガーは恐怖を伝えることが彼女の目的ではないと主張する。それよりむしろ、人々がその生活を切り開いていくことについて伝えたいのである。「これはフランク・キャプラの映画のようだと言われる」そして彼女は「これは現実だけだ」と言った。

(「デイリー・ヘラルド」1988 年 2 月 4 日)

➤ 4/18(土)小林エリカさんトークショー@渋谷アップリンク レポート

ラジウムを取り巻く色々なことは 53 世代未来にまで関わる

小林エリカ[以下、小林]:今日は、去年丸の内ハウス「COSMIC GIRLS」展で展示をさせていただいた時に作ったポスターを持ってきてみました。裏側がラジウムの半減期のカレンダーになっていて、この映画よりもずっと前にラジウムがどんな風に発見されたのか、ラジウムとは一体何かっていう話を先にできたらいいかなと思ひまして。

マリ・キュリーさんのお名前はみなさんご存知だと思いますが、彼女が歴史上はじめて放射性物質であるラジウムをその手に取り出したのが(カレンダーの始まりを指して)1902 年のことです。ラジウムの半減期と言われている 1601 年というのが一体どれくらいの長さなのかということを考えてこのカレンダーを作りました。

松村正人[以下、松村]:このカレンダーをみるとよく分かりますが、キュリー夫人が最初にラジウムを取り出してから現在まで、というのは、ほんの少しの時間しか経ってないですね。

小林:そうですね。1902 年に初めて取り出されたラジウムが半減期を迎えるのは西暦 3503 年ということになります。1601 年の時間の中では、大体 53 世代の子どもたちが生きることになります。ラジウムを取り巻く色々なことは、そういう未来にまで関わっているんだなあっていうことを今すごく考えています。

松村:その時間は「引き返せない時間」ということになりますよね。

小林:3503 年の西暦を生きる子供たちが、果たしてマリ・キュリーの名前を知っているかも定かではないけれど、それでも放射性物質が残っているのはどういうことなんだろうと、『ラジウム・シティ』を見て、亡くなった女性たちのお墓にガイガーカウンター(放射線量測定器)を近づけると未だに放射線を検知して音が鳴るといことがすごく印象的で、その音はきっと 1601 年後もまだ鳴るんだなと考えると、すごく興味深いというか。

ラジウムの発見やラジウム・ガールズと ひとつながりの日常

松村:興味の発端というか、きっかけはどこにあるんですか？

小林:きっかけは幾つかあって、2007 年から 2008 年の間、ニューヨークに住んでいた時に、マリ・キュリーのお嬢さんであるエーヴ・キュリーさんが 102 歳でアッパー・イースト・サイドで亡くなって、伝記でしか読んだことのなかった、すごく昔の、別の世界の人だと思っていた人のお嬢さんがしかもまだ生きていて、ご近所にいたっていうことがすごく驚きで、興味を持ち始めたというのが一つ。もう一つは「親愛なるキティーたちへ」という本を私は書いているのですが、それを書ききっかけになった私の父の日記を読んでいたらそこに「キュリー夫人伝を読了。胸打たる。」って書いてあったこと。それはちょうど敗戦から 6ヶ月ほどの 1946 年、父 17 歳の誕生日の日記でした。その二つがずっとなんとなく心に引っかかって気になっていて、エーヴ・キュリーさんが書いた母の伝記でもある「キュリー夫人伝」を読んだんです。そしたら、「ラジウムという物質が膨大な量の放射能を含んでいるかもしれない」という世紀の発見のメモが、「スグリのゼリーの作り方」というお料理メモの次に書かれていたという記述があって、すごく惹かれて調べ始めました。

松村:日常とは切っても切り離せない何かがあるわけですね。

小林:ラジウム・ガールズ、それから『ラジウム・シティ』について考えるときに、その一人一人の淡々とした日常がどうやって構成されていて、それこそスグリのゼリーを食べたかどうかとか、ディテールを知るといことに私自身はすごく興味があるし、そこからしか見えないものがあると思っています。

松村:それは歴史や日常や、科学的なものが折り重なるところがそこにあるっていうことなんですかね。

小林:そうです。私たちが今日起きて何を食べて、どんな音楽が好きで、というようなことと同時に、

今日はちょっとだけ線量が高いとか、今もまだ続いている福島第一原発のこととか、それがラジウムの発見やラジウム・ペイントをした女の子たちがいたという過去の出来事と、ひとつながりの日常を私たちが生きているということに、いかに気づくことができるのかということに私はすごく興味があります。

松村:『ラジウム・シティ』は 1987 年の映画ですが、昔っていう感じがしないというか、今起こっていることがここに映されているような、今自分が彼女たちと一緒にいるような感覚を感じました。小林さんはご自身の小説や漫画の中で歴史を行き来するという手法を取られていますが、何かの断絶があるわけではなく現在と過去を行き来するような、そういう視点でものを考えないといけないとお思いなんですか。

小林: そうしないといけないっていうよりは、自分がそうしたいという気持ちの方がすごく強いです。なぜ自分はこの状況にある今に、こうして生きているのかっていうことをすごく知りたいと思っています。

自分の身近にある目に見えないものを紙に書く

松村: キュリー夫人や、それからアンリ・ベクレルといった 20 世紀初頭の科学者の名前が震災を契機に蘇ってきたということが、小林さんが作品を作るきっかけになったということなのですか？

小林: 目に見えないものが自分の身近にあるということがすごく不思議というか、そういう中で生きているけれど、たとえ線量が高くても、でも何も目に見えないわけじゃないですか。それをどうしたら紙の上に書けるのかっていうことにすごく興味があって……。

キュリー夫人のノートを実際に見てみたいと思ってずっと探していて、明星大学という大学の図書館に 1 冊だけあることがわかったので、実際に見に行ってみました。

嚴重に保管されていたキュリー夫人のノートは、布張りの可愛いノートでした。そのノートにガイガーカウンターをかざしたら未だに数値が上がったんです。それはキュリー夫人はラジウムやポロニウムを扱っていたので、彼女の触った指紋の部分には未だに放射性物質が残っているらしい。この世にいない人の指紋がこの世に留められていて、目には見えないけれども、私たちは音として聞くことができるし、数値としてみるることができるっていうことに、私は言葉にならない感情を抱いて、どうやったらそれを書けるかなあとと思って、ずっと作品を作ってきています。

松村: 「光の子ども」と「マダム・キュリーと朝食を」は形式が違いますよね。それぞれやり方を変えてアプローチしないと自分のすることは納得できないということでしょうか？

小林: 歴史的なアプローチと、科学的なアプローチと、もっとプライベートなアプローチとどれも見ていかないと何が欠落すると思うんです。データだけ、歴史だけ、キュリー夫人の伝記だけ辿ってもわからない部分があって。放射能にまつわることで、もっと総合的に考えていかないと見えてこない膨大な分野というか、戦争の歴史もわからないといけないし、実際データとしてどうなのかとか、どういう科学に基づいているのかということ、本当に全部見ないと見えてこない分野だなというのは調べれば調べるほど感じる。そこで私は何ができてどんなことを書いたり、作ったりできるのかを今ひとつひとつ考えてる段階です。

西暦 2035 年より先を想像していくために

松村: それぞれの事象ごとに独立した何かがあるのではなくて、一つ一つのものが次のものを生んでいく歴史の流れがある。小林さんは作家として何かを作るときに、そういった流れの中に自分がいるっていう自意識というか自覚みたいなものはありますか？

小林: 100 年後の人が、私たちの今とか、私を見たときに、どう思うのかということにすごくよく考えます。100 年前にキュリー夫人がラジウムを発見したとかそういうことを淡々と追っていくと、なんでこのタイミングでこういうことをしたんだろうって思うことがすごく多くて。でもそれは今の自分にも言えることで、明日何が起こるかかわからないし、今取った選択が 100 年後どういう影響を及ぼしているのかはわからない。

ラジウム・ガールズの問題が世間の注目を集めたとき、まだ生きていたキュリー夫人はコメントを

出したんです。彼女はもちろん科学者だからラジウム・ガールズたちが助からないことを知っているし、本当のことを言った。そして、世間からすごくバッシングされた。でも、私にとっては、キュリー夫人がラジウムの顛末を、自分が“妖精の光”と呼んで我が子のように愛して枕元に置いていたものを、アメリカの女の子たちが舐めて死にそうになっているという事態を、本心ではどういう風に考えていたのかな、ということの方がすごく興味があります。その後の原爆を見たらどう思ったんだろう、とか。

松村: それこそ 2011 年まで生きていたらどうだったのかとか……。

小林: 私たちが 100 年後の世界を見たときにどういう風に思うのかということと同じかなって。

松村: このカレンダーで、半減期が訪れるときに、その時を生きる人たちはどう思っているのかということですよ。

小林: その人たちが 2015 年の今を振り返ったときに、いま私たちがとった選択がどういう判断だったのかが、その時になってようやく見える。その人たちにしかわからない。キュリー夫人のように正しいと思ってやっていたことが、意に反して、結果的に何か違うことを招くこともある。過去の歴史を見ることで、いまどういう選択をすべきかとか、いま私はどうすべきかというのは、自分なりに持ちたいなと思っています。

松村: この映画を含め、小林さんの書いた小説「マダム・キュリーと朝食を」や「光の子ども」も、歴史と空想の兼ね合いですよ。ただ歴史の事実だけを知ることとは違う回路で学びなおす、みたいな感じを受けたんです。次は何をしようとか考えてますか？

小林: 今は「光の子ども」の続編を描いているところです。あと小説の方もまた違うアプローチで、放射能のこととか、長い時間や目に見えないことについて考えていけたらなって思っています。

松村: 何年か経ったら答えが出るわけでも、問題意識がなくなるわけでもない。つまり、考え続けていけないといけないものでもあると思いますけど、いかがでしょうか？

小林: 西暦 3503 年より先に至るまでをどうやって想像していくかっていうことを考えるために、『ラジウム・シティ』のような映画を今見るということはすごく重要な事だと思います。ほんとに素晴らしい映画なので、ぜひお友達にもお伝えいただければ嬉しいです。

(取材・文: 則定彩香)

➤ 4/28(火)ピーター・バラカンさんトークショー@渋谷アップリンク レポート

隠蔽は現在でも世界中で行われている

トークショーの冒頭、『ラジウム・シティ』について「淡々としているのに、観る内に段々と引き込まれて怖くなっていく映画」と語ったバラカンさんだが、制作年度が1986年と知って驚いたという。これほどまでに重大な出来事であれば、もっと大々的に報道され、世界中の人が知っていてもおかしくないはずなのに、イリノイ州オタワで起きていたこの出来事を、バラカンさんも知らなかった。

ラジウムの危険性や工員たちの放射能による健康被害をラジウム・ダイヤル社は間違いなく知っていたのに、それを隠すこと、それがまかり通ってしまうことが恐ろしい、とバラカンさんは続ける。「しかし、そのような隠蔽は現在でも世界のあっちこちで行われているはず。私たちの多くが連想するのは東京電力のことだと思いますが、福島で働いていた原発労働者は、放射能の危険性は知っていたとしても、どの程度危険なのかというのは知らない。会社の責任者やメディアが説明してくれないと、彼らはその危険性を判断できないまま働くことになるのです」。

子供たちに責任を転嫁する無責任さ

バラカンさんの原発や原子力に関する問題意識は、テレビのニュースや新聞、映画などのメディアを通じて芽生えた。「中学生になるかならないかという頃、60年代初頭にイギリスで頻繁に起きていたデモのニュースを見て、核兵器に関する認識はしていたように思う。でも本当に原子力発電についての問題意識を持ったのは、スリーマイル島原発事故が起きたときだった」。スリーマイル島の事故は1979年。1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故が起きたときは「本当にやばいと思った」。食品に気をつけ始めたのもこの頃からだった。放射性物質の半減期や廃棄物に意識が向いたのは、鎌仲ひとみ監督の映画『六ヶ所村ラブソニー』がきっかけだったそうだ。「この作品を見て、これは絶対にダメだと思った。あれだけ危険な廃棄物なのに、処理する方法がなく、この地震がしょっちゅう起きる日本で“ただ埋めるだけ”。子供達に責任を転嫁するなんて、どれだけ無責任なんだとって」。

わたしにあるのはリスナーへの責任

こうした隠蔽は世界中で起きているが、民放のメディアにとりわけ大きな影響を及ぼすのがスポンサーの力だ。スポンサーの不利益になる発言はできず、電力会社は独占企業にもかかわらず、つまり宣伝告知の必要はないのに、多くのメディアに広告を出し続ける。2011年までテレビ局の一番のスポンサーは電力会社だった。

バラカンさんは「メディアはスポンサーを選ぶ必要がある」と強く主張する。実際に一度、電力会社の広告のナレーションの依頼があったが、断ったという。

また、東日本大震災のあとの2011年4月、バラカンさんがDJを担当するラジオ番組にRCサクセションの『ラヴ・ミー・テンダー』のリクエストが殺到したが、歌詞の「牛乳を飲んでえ」の一行が放送局の自主規制に引っかかった。「『風評被害を広げかねない』と言われたけど、それは『かけるな』というのと同じことです」。結局、『ラヴ・ミー・テンダー』はオンエアしなかったが、番組では代わりに、上から言われた、その曲をかけられない理由を正直にリスナーに伝えた。「わたしのいちばんの責任は、放送局ではなくリスナーに対する責任だと思っています。リスナーに対して正直に事情を伝えることは義務であるし、少なくともそうすべきだと思っています」。

蔓延する言葉狩りと事なかれ主義

トークイベントの当日、米・ニューヨークタイムズ紙に「安倍政権のメディアへの介入が成功している」(「Effort by Japan to Stifle News Media Is Working」)という皮肉な記事が掲載された。日本のメディアで現在起きていることを客観的に書いたその記事は、テレビ朝日の番組「報道ステーション」への政府の介入にも触れ、そこにはテレビ朝日関係者の証言も掲載されている。「ちゃんと記者が取材をすれば話してくれるのに、日本のメディアはどれも聞かない。聞いたとしても、載せない。それだけ今の政権が怖いのかと思うと恐ろしくなってくる」。

そのように、政府によるメディアへの介入がいとも簡単に成功してしまう背景には「日本人が他人と違うことをするのが美德とされない風潮の中で育つことが関係しているのではないかとバラカ

ンさんは分析する。「日本には“放送禁止”というものはなく、代わりに作用しているのは“自主規制”。それがメディア全体で共有されている」。

「アメリカはチャレンジ精神の国で、とりあえずやっちゃって何か問題が起きたら対処すればいいという考え方をする。日本はその逆で、そもそも問題を起こさないよう、少しでも問題になりそうなことはやらない傾向がある」と事なかれ主義に走りやすい日本の特徴を挙げ、結果として自主規制による言葉狩りが蔓延していることを指摘した。

メディアの役割

また、靖国参拝の報道について「本当に個人で行くならメディアに知らせずに勝手に行けばいい。そしてメディアも取り上げなければいい。いちいちメディアが報道するから当然中国や韓国は怒る」とし、視聴率至上主義で同じ話題ばかりを横並びで取り上げるメディアの風潮に警鐘を鳴らす。

「メディアも視聴率を取りたいから話題になることを取り上げる。でもどんなメディアでも価値判断があると思うし、同じ話題を毎回毎回選ぶのは能がない」というバラカンさん。最後に、自身のラジオ番組について「僕の番組では、常に他には影響されずに自分の考えを貫いていきたいと思っています。自分が本当に面白いと思っているものだけを紹介したい。あとはリスナーが僕の感覚に共鳴するかしないか。ラジオを聴くかどうかは、送り手に信頼を置いているかどうか。声はその人が持っているものがストレートに伝わるメディアだから、リスナーと信頼関係を築いていきたい」と語り、決意を示した。

(取材・文: 則定彩香)

radiumcity2015.com